

山口県立大学大学院留学生の日本語学習教育環境と教育支援ニーズ

Educational and learning circumstances and needs of foreign students at the Graduate Schools, Yamaguchi Prefectural University

井竿富雄・金恵媛・曾根文夫・坂本俊彦

IZAO Tomio, KIM Hyeweon, SONE Fumio, SAKAMOTO Toshihiko

This report is the result of interviews with students from abroad enrolled at Yamaguchi Prefectural University's Graduate School about the prevailing educational and learning circumstances and their educational needs. These foreign students wish to hear and understand academic Japanese, and aim to write their master theses in academic Japanese. The University appreciates the importance of support when learning the Japanese language, but foreign students were unaware of the support provided by Yamaguchi Prefectural University for master's students wishing to draft their thesis in academic Japanese.

はじめに

本報告は、山口県立大学の研究創作助成事業「修学目的別にみた本学大学院の魅力と課題－教育プログラム開発・修学支援制度の検討に資するデータ収集を目的として－」の一環として行われた「本学大学院に在籍する留学生の日本語教育支援ニーズに関する調査」に関するものである。

留学生がある教育機関を志望する時、その動機は多種多様であろう。ただ、その中でもやはり「よい教育を受ける機会」と「修了後の進路が開けている」ことは重要であると考えられる。山口県立大学大学院、とりわけ国際文化研究科では、留学生の割合が増えている。留学生にとっては、よい教育の成果として「日本語による質の高い学位論文作成」は重要である。質の高い論文を完成させることは、執筆者の高い日本語能力と十分な専門知識を証明する。また、質の高い論文を完成させることによって、博士課程への進学も可能になる。よしんば進学しないとしても、高い日本語能力を持つことで、職業人としての選択肢は確実に広がる。

とはいえ、質の高い論文を書くためには、論文にふさわしい日本語を書きうる能力を要する。学術論文作成のための日本語、いわゆる「アカデミック日本語」は、日本語ネイティブにとっても容易ならざる仕事である。これを来日して数年の留学生に執筆させようとするのは指導教員にも大学院生本人にとってもかなり重たい負担である。指導教員にとっては、学術的専門知識領域については指導できるが、日本語として正確さを保証するためには必ずしもその能力が伴わない場合もある。そのため、教育現場では指導教員が「専門知識は指導できるが、日本語については無理」と言ったり、規模がある程度以上の大学においては「専門分野のことについては指導教員が担当し、日本語の問題は日本語教員に任せる」として分業体制にしてしまい、留学生が困惑したりするということもあるらしい⁽¹⁾。実際のところ、日常生活で用いるのと各種専門領域で用いる日本語の単語には、意味的にかかなりの懸隔がある場合があるため「正しい用例なのか」が日本語教員にも判断しがたい場合もありうる。このような、「専門的知識」と「正しい日本語」の指導が引き裂かれた状態を克服し、日本語での質の高い学位論文を作成できるようにするには何が必要なのか。今回の調査はそのことをまず把握してみることを目的として実施するものである。本稿ではインタビュー調査の結果のなかで、本学で授業を受ける上での日本語運用状況や、日本語学習歴とサポートニーズについて主に紹介する資料としたい。

1. 調査の概要

この調査は、本学大学院の留学生が研究しやすい環境整備を目的に、大学院に在学する留学生を対象にインタビューを実施したものである。国際文化学研究所に在籍している留学生全員（10名）に調査協力を呼び掛けて、4名からインタビュー協力を得ることができた。インタビューでは、日本語学習の開始時期、日本語に関心を持った時期などから始まり、大学時代の日本語学習、日本や日本文化経験、大学院入学後の学習状況、また日本語学習において困難を感じる点、困難を感じた時の対処法などについても話してもらった。4名は全員中国からの留学生であり、修士課程二年生が1名で、修士課程一年生が3名である。4名という人数はかなり少ないものではあるが、現在本学大学院に在籍している留学生の発言としての価値は存在する。ただ、修士課程一年生の学生の場合、修士論文を日本語で作成する際に求められるライティングの課題については十分に認識しにくい可能性がある。

インタビューは、日本語学習や使用状況をめぐる共通の質問事項を中心にオープンエンドな質問を行った（半構造化インタビュー）。そのため、初回の調査（1時間程度）の文字起こしを検討して、補足調査を1回実施（20分程度）する方法をとった。一人に2回にわたってインタビューを行った。これらのインタビューは本人に研究目的及び内容、調査の進め方、研究倫理などについて説明をして同意を得たうえで実施した。文字起こしをしてもらったものを本人に示して内容の確認をしてもらったが、要望があった場合は削除、修正を行った。本報告では、話者を明記せずに発言内容を抽出して問題ごとに示した。

<インタビュー調査の概要>

- ・調査目的：留学生が大学院で学習、研究を進めるうえで直面している日本語の問題を把握し、支援ニーズを把握する。
- ・調査対象：本学大学院に在籍する留学生にインタビュー協力を依頼した。調査協力の依頼は大学院在学中の留学生全員にeメールで調査協力を依頼し、最終的に修士課程二年生1名と一年生3名の参加が得られた。日本語能力の観点からは、4人とも日本語検定試験N1に合格し、うち、3名は日本語で卒業論文を執筆している（残りの1名は英語）。
- ・調査方法：インタビューは、本学の共用研究室において、ボイスレコーダーを用いて実施した。約1時間程度の本調査を各人に1回（2023年11月14日、21日）実施した。文字起こし後の補足調査を20分程度、各人に対し1回（2023年12月5日）行った。調査内容（日本語学習歴と現在の日本語使用状況、日本語使用における課題など）についてインタビュー協力者の自由な回答を聞くことに主眼をおいた（半構造化インタビュー）。
- ・倫理的な配慮：個人情報保護の取り扱いを含む研究倫理上の問題について、本学の生命倫理委員会の承認を得ている（研究実施許可通知書番号：2023-37号）。

2. 調査結果：山口県立大学大学院での修学状況

(1) 留学生が大学院授業でまず突き当たる問題

ここでは、留学生が山口県立大学大学院に入学後、本格的に日本で日本語の講義を聴く、という段階で突き当たる問題などについてまず当事者の主な言葉を中心にみていきたい。なお、〔 〕は筆者らによる注釈である。

講義が聞き取れない状況と、その場合の対応

- ・言葉よりは内容のほうに分からなかったんです。例えば先生がちょっとスピードが速かった。
- ・最初の前期、前期の最初の1カ月はたぶん一番難しいと思っているんですけど、そんなに長時間に日本語を聞き続けることがあんまりなくて。
- ・横文字〔カタカナ語〕が、自分にとって、やまと言葉と漢字がめちゃ分かりやすいと思うんですけど、横文字が出てくると、「うん？ どういう意味？」って、ふっと思っちゃいますよね。いつもパソコン持ってて、Google翻訳と中国語訳と辞書を開いて、3ページを開いて、ふっと出てくる横文字が分からないと、その3カ所に入れて、どういう意味か調べます。
- ・語学提供のアプリがあって、そこで何か分からない時は、直接友達に聞くのはいいんですけど、でも、直

接誰かに聞くのは結局その人の1人の経験というか、1人の考えしかもらえないっていう、こだわりがあるんですけど、一応自分としては、まずHello Talkでそういう投稿を出して、みんなの意見、みんな、日本人の、もし誰かがコメントしてくれたり、普通には3~4人ぐらいがコメントしてくれるんですけど、3~4人はこういうことはどう、この単語とか、こういう文法とか、どういう時に使うとか、どういうふうにするのが普通、日本人にとって普通のことを、こういうやり方を使っています。

- ・歴史の本の専用の名詞等〔専門用語〕がちょっと理解しにくいですね。
- ・大学院の授業はやはり本の内容だけではなく、広い範囲のことを先生から教えてくれますし、自分も先生があんまり知らないことも、学生としても先生に伝えるという意識で、とても役に立つと思います、研究に。

履修科目について、直接的な感想としてあったのは、「ひとコマ日本語だけで講義を受ける」ということ自体が大変だった、というものである。この感覚が軽減されていくなれば、日本語学習の度合いが進んでいることになるわけである。また、教員として気を付けておかなければならないのは、「話が速い時」に聞き取りづらい、ということと、「専門用語がわかりづらい」という発言であった。大学院の講義にあっては、専門性が高いのはあらかじめ了解された前提である。そうであったとしても、留学生にとっては母語以外の言語でその専門用語が発せられる、というだけですぐには理解しづらい、ということを経験に入れなければならないことがわかる。

講義中などにわからない表現などが出てきた場合どうするのか、という質問に対しては、多様な返答があった。「1年生の時は、学部の友達がやってくれました」とあるように日本人学生などにレポートの添削をしてもらって解決していった学生もいるが、「一緒に授業を受けている学生同士に聞くのは、たぶんみんなに邪魔になるかと思って」と聞かない、と遠慮しているという意見があった。わからない言葉や内容があっても、その場では「そのまま放置して、次のセンテンスに追い付くっていう感じ」になるようだが、それでも努力して分からない単語を減らそうと努力しているという返答もあった。その際、ソーシャルメディアを利用して、そこに集う人に日本語表現などについて複数の意見を聞くことにしている。「やはりクラスメートと話し合うと、理解しやすくなると思います」として、対面でのコミュニケーションで質問する場合でも、あらかじめ独自に調べてみる、という。調べ物の際、日本と中国の双方の検索エンジン、どちらを使うか、という質問に対して「〔日中の検索エンジン〕どっちも使います。私は、やはりGoogleの検索した内容と、中国のウェブサイトのことを検索したものとちょっと違います」と答えている⁽²⁾。

ところで、日本人と中国人のどちらに訊くか、と問われた学生は、「それはやはり中国同士に質問しますね。日本人とか、私もそんな日本語がそんなに上手ではないから、やはり何か問題があるなら、中国人留学生とちょっと助けてくれて頼みます」と答えていて、日本人に聞くことには若干遠慮がある。似たような状況が、学部の授業を受講するケースでもみられた。講義そのものは難しくないが、授業でのグループ活動には参加しにくいという意見であった。後述するように、教員の話し方や講義の内容面での難しさというより、日常会話が上手ではない、年齢差もあるから話しにくい、ということであった。

以上のことから、講義が分かりにくい要素としては話す速度、カタカナ語、そして専門用語が挙げられた。分かりやすい授業のために、学生に予習・復習の徹底を求めることはもちろんであるが、教員側としてもノンネイティブにもわかりやすい表現や伝え方を工夫する必要がある。講義でわからない言葉や内容があった時の対応として、日本人学生との接点を拡大できるように検討が求められる。

それでは、このような留学生たちが、本学大学院に入学するまでどのような日本語（学習も文化的なものも含めて）体験をしてきたのか、そして本学で学ぶ際にどのような日本語サポートがあるとよいか、について得られた答えについてまとめた。

(2) 本学入学前の日本語学習経験と日本語サポートニーズ

前節では留学生が現在授業を受けているなかで実感している日本語の問題や対応方法を中心にみた。ここでは、4名の学生がどのような日本語との出会いや日本語学習経験を経てきたか、大学にどのような日本語サポートを期

待しているか、について報告したい。これによって、今後も増大すると予想される留学生の日本語への支援、さらには大学院の学習環境を改善する際の方向性が見えてくると考える。

入学前の日本語学習歴

- ・ずっと子どもの頃からアニメが好きになって、で、アニメを見て、高校ぐらいまでずっとアニメオタクとか、そういう感じでしたと思いますので。それから、大学に入って英語にして〔中略〕アニメより日本の文化とか、日本にちょっと、日本という国自体に興味があって、行って、そこで学びたいなと思ひまして。
- ・日本語を学んだのは、「大学の3、4年生ぐらいの時、3、4年生ぐらいの時は日本に行こうかなと決まりまして、そして、半端な日本語じゃ駄目だと思ひまして、ちゃんと勉強しましょう〔後略〕。
- ・〔日本語で書いた卒論〕具体的なテーマがよく覚えてないんですけど〔中略〕その時担当の先生がちょっと厳しい先生ですので、たぶん3~4回くらい添削してくれてたんです。
- ・〔6歳頃からアニメ視聴していたが〕宮崎駿先生のアニメをいっぱい見ました。しかし確かにその時は、全部日本語はもう中国語に訳して〔中略〕欧米の作品も日本や韓国の作品も、全部中学校の時からはもとの言葉を見始めました〔中略〕日本語学科選んだきっかけは、多分高校3年生の時から日本語の歌を、一番好きなのでその時は日本語学科は選択する、決めた。
- ・日本語で〔中略〕毎週ゼミをする、そのかたちは全然ない。ただ、指導先生は最後にあなたの卒業論文を見て、何か問題があって指摘して、また修正して、しかしその流れもとても短い、厳格、厳しくない。私自身も多分1カ月だけぐらいで、卒業論文を書きました。

日本語能力・支援について

- ・今まであんまり日本語で文章書いたことはないので、大学の時も日本語の、日本語学部ではなかったの、大学院に入ってから、研究計画書を、初めに長い文を作ったりするのは始めたんですという感じなんで、最初のとはちょっと慣れないとか、そういう困りはちょっとありましたんですけど、今は何とかなっていると思います。
- ・確かに自分が、向こうで勉強した日本語と実際に書く日本語は結構違うと思うんで、自分が書く日本語っていうか、ほんとに小学生みたいに、小学生みたいな書く能力で、こういう文章出すのが恥ずかしいなって時々思いますね。
- ・例えば週末はどこに行くか、生活面のコミュニケーションする時は、確かに入らないと、多分確かに私たちが授業で普通に話すの言葉は、本当に日本人の学生の間には話す言葉は違うし、ある時は理解できないと思います。
- ・普段は日本語の本を読んで、ノートを作るのはあるんです。あとは一応、日記が書いています〔中略〕〔今〕週〔は〕、日本語で、〔次〕週〔は〕、英語で書いてあるんです。
- ・レポートの書き方とか、そういうのを支援が欲しいです。
- ・そうですね、ここに来られる留学生たちはたぶん向こうで日本語専門の子が多いと思いますし、N1ぐらいの聞き取りとか読解とか書く力とか、もう備えていると思います。自分は今日何をしているかみたいに、日記みたいなものはたぶんみんなできると思うんですけど、でも、どうやって文章を美しくできるとか、文章をもっと日本人らしくできるとか、そういうことでは向こうではできないと思うんです。それからの授業で、サポートといえば、こういう、文章が美しくなる力、美しくなるサポート、授業をしていただければ助かります。

日本語に関心を持つようになったきっかけについては、日本のマンガやアニメーション、歌、そしてゲームなど、日本のポピュラーカルチャーを挙げる意見が目立った。子供の頃からアニメーションを見ていて、高校や大学入学頃に日本の歌や文化へと関心が広がっている。日本語能力の点では「聞く」「読む」スキルが中心になっている

ことがわかる。本学に入学する前の滞日経験や仕事で日常的に日本語を使用した経験をもつ場合では「話す」ことに対する負担感が相対的に軽いことも確認された。また、今回の調査では4人のうち3人が大学で日本語を専門に学び、卒業論文も日本語で作成している。卒業論文の作成を通して日本語で「書く」ことに少し慣れていることもあってか、今後サポートが得られるなら、「書く」より「話す」能力について支援をしてほしいという意見があった。留学生の中に、学術用語などを駆使した正しい日本語による論文を書く心の準備と訓練への要望がある、と語っている者がいるのは心強い。一方、学術交流協定校からの学生の場合、本学入学前に日本滞在を経験していない可能性が高いので、今後も「話すこと」「書くこと」以外についても支援ニーズがあると考えられる。入学前に日本語学校と専門学校に通った経験をもつ学生の場合も大学院の受験対策として専門学校で研究計画書を書く指導を受けていた。同じ授業を受けている留学生のなかに日本語スキル別の差異があることも理解しておく必要がある。

山口県立大学大学院受験にあたって、留学生には日本語能力検定試験のN1程度の語学力を要求している。日本語能力検定試験の受験歴と現有級について尋ねたところ、3名が大学3～4年次に、1名は専門学校在籍時に合格している。このうち1人は、本学入学前に2年間の日本留学経験をもつうえに、在籍していた専門学校で大学院進学に向けた日本語のライティング指導を受けている。日本語で卒業論文を執筆した学生の場合は「書く」能力より「話す」能力に対するサポートを希望していた。日本語での論文執筆経験を持たない学生の場合は、「一番簡単なのは、聞く。」であり、続いて、「話す」「読む」の順である。「最後は書くです」と述べ、日本語ライティングの支援に期待を示している。

ただ、現実には留学生は、大学院入学後に日本語で展開される講義を聴き、課題提出を命じられて初めて日本語を理解すること、日本語で相手に了解してもらうことの難しさを知ることになる。少なくともインタビューに答えてくれた留学生の大半にとっては、日本語で「レポートを書く」ということがかなりの重荷になっている。どうやって書いたらよいかかわからない、という。論文でなく、感想文でなく、まして作文でもない。このスタイルをどのようにすれば身につけられるのか、という悩みが観察される。

(3) 大学院入学後の日本語学習・日本語での生活

4人の院生は一定の日本語能力を持っている。その上で日本に来ている。そうであっても、日本社会にいるからには日本語で社会生活を送らなければならないことにそれなりのプレッシャーを感じているものと考えられる。このような生活環境で、学内での交友関係をもっているか、制約された中でのアルバイトなどについてもインタビューでは聞いている。これもまた、日本語能力との関係があると考えられるからである。

大学院入学後の日本語学習・日本語での生活について
<ul style="list-style-type: none"> ・バイトは、そう〔バイトで日本語をかなりうまくなったという感じあり〕ですよ。バイトはちょっといろんな、いろんな種類の言葉も結構身に付けたと思ひまして、あとは敬語のほうですよ。 ・〔日本人の友達〕結構いますね。私は友達づくりにくいのは全然なかったんですけど、私は友達をつくるのは、相手は何が、ちょっと今は、日本人であろうが、今の交換留学しているアメリカ人であろうが、相手の国の若い者が何が、何をはやっているのか、何が好きなのか、そこから先に調べていって、調べるよりは自分も興味あるかもしれないものなので、そこから、日本人の人たちとは例えばこのアニメ見えていますか、このゲームしていますか、この歌聴いていますか、この歌手は好きですね、僕も好きでした、そんな感じから始まって。日本人の友達からもいろんな変な日本語というか、あと、今の若者が使ってる日本語とかたくさん習いましたので。 ・自分はもうせっかく留学したのに、ちょっと日本の友達もつくりたい気持ちもあります。学校以外の友達をつくりたいの気持ちもあって、同じアプリで、Hello Talkのアプリ、ちょうど向こうも中国語に興味を持っていて、語学交換みたいな感じで友達をつくったり、オフ会みたいな感じで2人で会ったりすることもあります。 ・私は最初の時も、自分の指導先生といっぱい話してコミュニケーションの機会がないと悩んで、その時先生も学部のゼミに入って、私は多分学部のゼミで3人も一緒にコミュニケーションして〔中略〕ゼミ終

わった後、私と学部生も例えばある教室を探して、また自分の能力をコミュニケーションもっと生活的なコミュニケーションはします。〔一緒に話す人は、いつも〕同じ人です。

- ・やはり雰囲気かな。日本人の学部の学生たちも、自分の親しい友達とか、親しいクラスメートとかに話し合っ、私は彼女たちの会話を参入することは難しい。ちょっとあいさつくらいかな。
- ・年配の人と話す時は、ちょっと相手の話すの聞きにくいかな。理解にくいかな。やはり日本語は話すと書く、大変違うだから、いくら本を読んだり学校と勉強しますが、でも日常生活の年配の日本人と話し合う時は難しいと感じました。

これは交友関係などもかかわるのだが、日本人学生、特に学部生と関わろうとすると、会話に困難を感じているようである。日本人の若者同士での日常会話では、話題によってはかなりくだけた日本語なども用いられる。そのためか、留学生の中にはそこまでは理解できないし入り込めない、というような感覚を抱いている、ということもわかられる。そこを突破できている学生の場合、相手の関心があることなどを聞き出し、そこから積極的に人間関係を形成しようとしている点が注目される。しかも日本人だけでなく、交換留学で来ている北米圏からの学生ともそのように交流できている、という。

全員に共通していることで気にかかるのは、地域社会との接点が少ない、ということである。アルバイトをしている学生はアルバイト先での人間関係などができているようであるが、近隣の人々とのかかわりをほとんど持ったことがない、という答えがかえってきている。ただし、このことは自宅生ではない日本人学生も恐らく同様ではないかとも考えられる。

考察

本報告は、少数の人に対してインタビューした結果をまとめた、非常に初歩的なものでしかない。ただ、ここからも見えてくることについて考察を記し、今後の教育改善の課題と材料としておきたいと考える。

留学生が日本語や日本文化そのものに関心を持つのはポピュラーカルチャーからであることは間違いない。日本人学生がK-POPから韓国語に関心を持つと同様である。アニメーションやドラマを字幕付きで視聴し、翻訳を付けた日本語のJ-POPを聞くことから日本語・日本そのものへの関心が拡大している。そしてその関心が留学生を山口県立大学へ誘ってきたことは非常に興味深い。

ただ、入学してからの状況についての発言を読んでいくと、各種の問題が伏在していることがわかる。一つは日本語の環境にどのように慣れるか、という導入の部分である。中には、非常に積極的に日本人学生とも交友関係を持ったりしている者もいる。反対に、周囲の学生に邪魔になるかもしれないから、と質問を控えてしまう者もいる。そしてそのような状態で日本語による大学院の講義を聴いた場合、教員が気づかないうちに、理解が追い付いていない大学院生がいることを見落としてしまうということがありうる。また、話のスピードが速い、カタカナ語や専門用語が頻出するなどのことがあると、日本語ネイティブでも理解に時間がかかるが、留学生の場合さらに理解するまでの時間がかかる、ということに留意しなければならない。

もう一つは「文章を書く」ということへの注意である。今回インタビューした4名の大学院生には「書く」ことに対して苦手意識を持っているものが多かった。「論文ではなくレポートが書けない」という形でそれを示していた。ただ、レポートは書けないが学術論文は書ける、という発言内容は容易に信じてよいものかどうか分からない。レポートよりも厳格にルールがあり、場合によっては書いた人の社会的生命をも左右するような学術論文⁽³⁾を執筆することは本人たちの気づかない困難があるはずである。何よりもまず、論文を書くために必要な研究をしなければならないからである。研究するための日本語力が十分に備わっているかどうかの問題は常に留意しておかなければならない。明治大学では、大学院生向けの本格的な日本語論文作成・添削の授業をしている⁽⁴⁾。一橋大学では、「日本語添削チューター」という制度が置かれている⁽⁵⁾。山口県立大学にも学部生向け「ライティング・コンシェルジュ」やSPARC事業による論文作成サポートの制度があるが、留学生はこれらの制度について情報が届いていなかった。これらの仕組みに対しては重ねて案内しているが、よりていねいに周知していくことと、留学生がアクセスしやすい方法を検討する必要がある。

また、今回は留学生自身が自身を語る場面からしか調査ができていない。指導する教員の側から見れば、全く違う問題が抽出される可能性がある。例えば、留学生が「できている」と考えている言語スキルについて、指導教員から見れば全くそうではない、ということがありうる。このような問題を考えることも、今後の課題として浮かび上がる。

※本報告は、令和五年度山口県立大学研究創作助成事業による成果のひとつである。本報告作成にあたり、利益相反は発生していない。

-
- (1) 『作文教育における日本語教師と大学専門教員との協力のために』国立国語研究所、2004年。
 - (2) それでも、厳密にはGoogleで調べる方が多いと回答している。
 - (3) 修士論文提出に際して「コピペルナー」でのチェックをかけ、「盗用」などのルール違反がないようにするというルールがあるのはそのためである。本人が意識していなくても引用が長すぎたり注を忘れたりすると「盗用」の疑いをかけられる。国際文化学研究科では「国際文化学研究法」という「研究に関する基礎的な事項」を認識してもらう科目を設定している。
 - (4) 「日本語論文作成サポート」https://www.meiji.ac.jp/dai_in/grad-japanese-support.html
 - (5) 「日本語による学習・添削サポートのご案内」<https://international.hit-u.ac.jp/cgee/advising/tutor/>